

* 京北中学校調査概要

中学校における学習習慣の形成過程と学習環境(2)

——成績が低い生徒たちの学習の様相——

報告者 センター教務補佐 市 川 洋 子

学校機能ユニットでは、2003年4月にK中学に入学した生徒たちを対象に継続して調査をおこなっている。本年報の6号では、2003年4月～9月までの調査結果について報告を行った。今回は、成績が低い生徒たちの学習の様相に焦点を当てた分析結果の報告をおこなう。具体的には、成績と学習行動（家庭での学習時間や学習スタイル、授業への参加、学習について相談できる友達の数）との関連について検討する。その結果から、成績の低い生徒たちへの学習支援について考えてみたい。

■ 調査目的

学力や学習時間については大規模調査がさまざまな機関によっておこなわれている。しかし横断的な手法が用いられることが多い。また、縦断的に調査されていても、各学校の取り組みを考慮した考察や変化の要因について考察されたものはすくない。そこで本研究では、学習環境が大きく変化する中学入学後の生徒たちの様子を縦断的に調査し、対象校の取り組みや授業の様子も考慮しながら、特に成績が低い生徒たちに焦点をあてて学習の様相をとらえようとした。

■ 分析方法（調査概要）

調査対象：私立K中学（男子生徒44名、2クラス）

調査時期：2003年4月～2004年3月

調査方法：授業観察は主要5教科について全学期を通しておこなわれた（1学期は各教科につき10～11授業、2学期、3学期は各教科につき2授業）。質問紙調査は、計4回おこなった（1学期前半、1学期後半、2学期、3学期）。調査内容は、①1日の宿題時間・宿題以外の勉強時間（1学期前半、後半、2学期、3学期の計4回）、②成績の自己評価「成績はよいほうだ」（1学期に1回）、③学習習慣の自己評価「宿題は忘れずにする」（1学期に1回）、④学習について相談できる友達の数（各学期に1回で計3回）、⑤学習スタイル（2学期に1回）、⑥学習参加意識（2学期に1回）。なお、成績については、各学期の中間テスト、期末テストの点数を5段階に

変換したものを学校の許可を得て分析した。

学校の特徴：中高一貫教育の男子校である。入学時には、小学校で成績があまりふるわなくても、中学校からがんばれば成績が変化すること、そのために努力することが大事であることを伝え、学習に対する学年全体の取り組みとして、毎授業後に出される宿題と毎日おこなわれる小テストがおこなわれていた。

宿題は、家庭での学習習慣を身につけさせるねらいから全教科において毎回だされ、授業時にやってきたかどうかのチェックがおこなわれていた。

また、小学校での知識や授業で習った内容の復習のため、1時間目が始まる前に15分程度の時間を用いて小テストがおこなわれていた。小テスト実施の目的には、やればできるという感覚を育成することにも含まれているため、出題される内容については事前に告知された。一定の点数がとれなかった生徒は、放課後に集まって再テストをうけていた。

対象校では、各教師たちはカウンセリング研修を受けることが義務づけられており、生徒たちの生活指導は丁寧におこなわれていた。特に中学1年生の場合、各クラスの担任と副担任は教室に近い場所に学年職員室が設けられ、そこで仕事をしていた。学年職員室には生徒たちが頻繁に顔を出していた。各教室の鍵をとりにきたり、授業前に資料等をもらうためにやってきたり、気軽に何かを話にくる場にもなっていた。教師たちも教科の枠を越えて、生徒の指導に必要な情報を交換したり、それぞれの生徒への見方について話をするなかで生徒の新たな面を見つけだしたり、生活指導について相談していた。

■ 結果と考察

1. 1年間における成績の変化

学期別の成績の関連を検討した結果が表1である。

表1 成績の相関

	1 学期 期末	2 学期 中間	2 学期 期末	3 学期 期末
1 学期 中間	.91**	.32*	.39**	.27+
1 学期 期末		.40**	.45**	.31*
2 学期 中間			.95**	.93**
2 学期 期末				.91**

**p<.01 *p<.05 +p<.10

まず、全体をみてみると、正の相関が非常に高いことがわかる。言い換えれば、年間を通して、高い成績をとる生徒は高い成績の、低い成績をとる生徒は低い成績のまま変わらない傾向がみられる。

次に、相関係数の値を横にみていく。1学期中間テストをみると、1学期期末テストの成績とは相関が.91と非常に高いが、2学期中間とは.32、2学期期末とは.39、3学期期末とは.27と多少の変動はあるものの、時間が経過していくにつれ相関係数が小さくなっていく。他学期の成績も同様の傾向がよみとれる。

以上の結果から、各学期の成績同士の関連は強いものの、時間の経過とともに多少弱まっていくことがわかる。

2. 成績と学習行動との関連

今回の分析では、3学期の成績と各学期における学習行動（家庭での学習時間や学習スタイル、授業への参加、学習について相談できる友達の数）との関連について検討を行った。

(1) 成績と家庭学習時間との関連

成績と宿題時間との関連

1学期の前半に測定した宿題時間との間のみに負の相関がみられ（ $r = -.29$, $p < .05$ ）、それ以外の学期においては有意な関連がみられなかった（なお、分析において、学習時間が3時間を超えた5人の生徒は例外として分析から除外した）。つまり、1学期前半の時点で、成績が高い生徒ほど1学期の前半では宿題を短時間でっており、反対に成績が低い生徒は長い時間をかけて宿題をしていた。また、成績と「宿題を忘れずにする」との項目との関連も検討した。すると、それらの間は正の相関がみられた（ $r = .40$, $p < .01$ ）。つまり、多量の宿題を前にして、成績が高い生徒は短時間で宿題をきちんとやっていくことがでる。反対に、成績が低い生徒は、宿題に時間をかけて取り組むものの、きちんと終えることが

できなかったのだろう。

これまでの研究結果から、成績が高い生徒ほど家庭での学習時間が長いことが報告されている（経済協力開発機構・OECD教育研究革新センター、2003）。しかし、対象校では、1学期前半は逆の結果が得られ、その後は、成績と宿題時間との間には関連がみられなかった。その理由として、対象校の取り組みが影響しているのだと考えられる。対象校では、小学校でどんなに成績が低くても、中学から成績をあげていくことが可能であることを伝え、仕切りなおしをするように生徒にすすめていた。また、やればできるという感覚を生徒に持ってもらうためにテストの仕方に工夫をこらしたり、声かけをしていた。そのため、1学期前半では、成績が低い生徒であってもあきらめずに長い時間をかけて宿題にとりくんでいたのだろう。しかし、時間をかけても宿題をきちんとやっていくことが難しい生徒も存在していた。そのため、1学期後半から、成績の低い生徒たちのなかで変化が生じ、やる気をなくして宿題時間が減少する生徒、もしくはさらに時間を増やす生徒といった二極化が生じていた。そのような変化により、1学期後半から3学期においては、成績と宿題時間との間に関連がみられなくなったのだと推測される。これまでの研究から報告されているように、成績と宿題時間との間に正の相関関係がみられなかったのは、対象校の取り組みが功を奏しているのだと思われる。今後、成績の低い生徒たちの勉強時間がどうなっていくのかについてさらに調査をしていく必要があるだろう。

成績と宿題以外の勉強時間との関連

勉強時間と成績との関連をみると、3学期の勉強時間のみ、成績と負の相関がみられた（ $r = -.32$, $p < .05$ ）。つまり、1学期から2学期までは、成績と勉強時間の間に関連がみられないが、3学期になると、成績の高い生徒は勉強を短時間で済ませ、低い生徒は長い時間おこなう傾向がある。また、1学期前半に各教科の「成績はよいほうだ」の各教科の合計得点と3学期の成績とは正の相関がある（ $r = .41$, $p < .01$ ）。つまり成績の高い生徒は1学期最初の段階で自分は成績がよいほうだという有能感を持っており、3学期には勉強を短時間で済ませる。反対に、低い生徒は長い時間かけてやっているものの成績に結び付かない状態があると思われる。この状態が続くと、結果と努力の随伴性が感じられないため、成績の低い生徒のなかにもあきらめて勉強しなくなる者があらわれ、これまで報告されたように成績の高さと勉強時間に正の相関がみられるようになってしまうのかもしれない。

このように見てくると、学力が高いほど勉強時間が長いとこれまで言われてきたが、ひとつの学校にしぼってみると、1学期前半の時点で宿題時間は成績の低い生徒ほど長く、3学期には勉強時間においても成績の低い生徒ほど長いという結果がえられた。

(2) 成績と学習スタイルとの関連

成績が高い生徒ほど短い時間で効率のよい勉強法をしているのがわかった。では、勉強の仕方に違いがあるのだろうか。

本調査では、市川・堀野・久保(1998)の研究にならって、「方略志向」「意味理解志向」「思考過程の重視」「失敗に対する柔軟性」といった学習スタイルについて調査をおこなった。その結果、勉強方法を工夫するといった「方略志向」、深く理解するように図や表を作成しながら勉強する「意味理解志向」、答えよりも考え方を重視する「思考過程の重視」といったものについては成績との関連はみられず、言い換えれば、生徒本人が意識している学習スタイルと成績との間には関連がみられなかった。ただし、「失敗に対する柔軟性」と成績とは正の相関関係があり($r=.30, p<.05$)、成績が低い生徒ほど、失敗を恥ずかしいと感じたり、がっかりすることを示していた。

(3) 成績と学習相談ができる友だちの人数との関連

1学期、2学期、3学期に相談できる友達の人数を調査した。その結果、成績が高い生徒ほど1学期の時点で相談友だちが多い($r=.43, p<.01$)。しかし、その後は、成績の低い生徒たちにも相談相手が増えて行き、2学期、3学期ではそのような傾向はみられなくなっている。

(4) 成績と授業参加との関連

授業中に質問したり発言するといった授業への「能動的参加」と成績との間には、有意な関連がみられなかった。しかし、ノートをとる、人の話を聞くといった「受動的参加」との間には正の相関の有意な傾向がみられた($r=.25, p<.10$)。つまり、他者から観察しやすい発言や質問といった学習行動においては成績による違いがみられず、ノートのとり方や聞くといった観察しにくい学習行動のなかに成績の違いが反映されやすい可能性がある。

■まとめ

以上から、対象校では、成績の低い生徒たちほど、1学期の前半の時点で長い時間をかけていることがわかった。しかし、努力と結果が随伴せず、そのうえ、1学期は、学習について相談できる友人は成績の低い生徒ほど少ない。また、3学期にも、宿題以外の勉強において成績の低い生徒ほど長い時間をかけて取り組んでいることがわかった。しかし、宿題時間と同様、成績の低い生徒ほど取り組んだ時間と結果とが随伴しない。今後、この状態がそのまま続くのか、これまでの研究結果のように成績の低い生徒はやる気を失ってしまい、家庭での学習時間が減少していくのかについては、今後さらに調査をしていく必要があるだろう。

また、答えをだすプロセス、理解を大切にするとといった学習スタイルについて生徒に自己報告をもとめた結果、成績による違いはみられなかった。また、授業参加についても、他者からは見えにくいノートをとる、人の聞くといった行動ほど、成績が低い生徒ほど行えていなかった。したがって、成績の低い生徒の学習をサポートしていくためには、勉強のやり方を本人に直接聞くのではなく、実際の解き方、考え方を細やかに捉えていくこと、そして授業の中でもノートのとり方や聞き方といった点を注意深くみていくことが成績が高い生徒以上に大切であることがわかった。その際には、成績の低い生徒ほど失敗に対する柔軟性が低いということもあり、受容的な雰囲気での指導が行われることが大事であることも示唆された。

<引用文献>

- 市川伸一・堀野緑・久保信子 1998 学習方法を支える
学習観と学習動機 市川伸一(編) 認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導 ブレーン出版
pp.186-202
経済協力開発機構・OECD教育研究革新センター 2003
図表で見る教育：OECDインディケータ(2002年版)
明石出版